

山形盆地から仰ぎ見る朝日連峰は、屏風の如く西方に連なっている。白い衣をまとった山並みが朝の陽光に浴し光り輝きだす時、人々は神の座として伏し拝みつつ「朝日岳」の名を与えたのだろうか。

朝日岳は孤高の聳える火山と違い、大朝日岳、西朝日岳、寒江山、以東岳などを主稜とする連峰である。2000mにも満たない山々だが、全山花崗岩という地質的条件、強風、多雪という気象的条件が魅力ある連峰を造りあげ、広く人々から親しまれてきた。そのうえ、山麓には山岳信仰の痕跡をとどめ、主稜線には慶長年間に切り開かれた軍用道路の面影を残し、三面や大井沢などの集落にとってはマタギの舞台になっており、人文的にも興味の尽きない山域である。

朝日連峰は、山形、福島、新潟に跨る「磐梯朝日国立公園」である。山岳信仰の地として名高い出羽三山、太古からの自然を残す朝日と飯豊連峰に加えて吾妻磐梯の火山地形から成る広大な地域であるが、「磐梯朝日」と冠称されているのは、大朝日岳の端正な三角錐の山容と知名度の高さからだろうか。

朝日連峰で雪崩によって磨かれた急峻な岩壁で知られるのが祝瓶山北東面、エズラ峰東面、紫ナデ南東面である。国立公園記念切手は天狗角力取山から竜門山に向かって直ぐの山、ウツノシマか次の見晴台から見た以東岳で、その前方にごつごつした二つの岩峰、エズラ峰が映っている。天狗の小屋からナメコを求めて出谷川への登り降りて眺められるエズラ峰は手招きしているこのように見えた。早春に天狗から向かったが、出谷川を渡れず断念した。翌年、再度東面から近づいたら、雪崩の後で落ちてくる雪は無く頂を踏むことができた。

雪深い山麓も4月下旬になると熊狩りで春が始まる。高校3年の4月下旬から飛び石の休みを連休にして、朝日連峰を縦走する先輩さんに同行させてもらった。天狗の小屋で、志田忠儀さんを頭(かぶ)にした熊狩の大井沢組と同宿になった。お願いして狩りに同行させてもらったことを思い出す。狩り場は天狗角力取山の次のピーク、ウツノシマの東面、見付川の支流湯沢であった。ここに「さいづち穴」があり、何年か周期に熊が冬眠するのだという。冬眠していることを当てにしたクロマキ(押し巻き)法であった。私たちの役割は、「通切(トリ切り)」というもので、熊が来たら顔を出し立前(タマエ)、射手に誘導する係を言い渡された。勢子(セシ)の声が遥か下方から聞こえ始め、次第に近づいてくるのに身震いするほど緊張したのを覚えている。

冬の間静まり返っていた山麓は、5月に入ると明るい陽だまりに白いうぶ毛のゼンマイをはじめとする山菜取りでにわかには活気づく。そして、梅雨明けと共に夏山シーズンに入り、幅広い尾根は明るく、多種多様の高山植物が一斉に咲き誇る。なかでも、鳥原山のミツガシワ、西朝日岳のイワウメ、狐穴付近のヒメサユリ、大朝日岳、寒江山と以東岳のヒナウスユキソウなどが特に目を引く。これらの花々に加えて、朝日連峰を特色づけるブナの原生林が、野獣の毛並みをおもわせる丸みをおびて山腹を這い上がっている。

三方境や狐穴小屋から登山路に沿って以東岳方面を眺めていると、中先峰の登山路の東、斜面南側に雷光形の路型が藪中に見える。直江兼続によって開かれたとされる米沢と庄内を結んだ「朝日軍道」である。血気盛んな頃、戦国武将の痕跡に憧れ近づいてみたことがあった。チシマザサ、シャクナゲなどが密生しており、路形を辿るところか、その存在すら確認できない状態だった。

日本に残る軍道としては、武田信玄が飛騨を攻める時に通った安房峠(1812m)越えや、佐々成政が越中と信州を直接結んだザラ峠(2353m)、針ノ木峠(2541m)を越えなどが知られている。これらは朝日軍道を凌ぐ高さだが、峠越えである。朝日軍道は、東北の豪雪地帯に横たわる主稜線を延々と辿るもので、高度だけでは比較できない困難さがあったと思われる。しかし、朝日山地の切峰面図を見ると準平原的な小起伏面を読み取ることができる。朝日連峰の特徴である大きく波打つようにうねる稜線を巧みに利用したものであった。

戦国大名の奇知によって実現したにもかかわらず人知れず歴史に埋もれ、陽の目を見ないままに過去のものになっているのは、関ヶ原の戦いに敗れた側が造った軍道なるが故の宿命なのだろうか。しかし、忘れ去られつつあった軍道が再び脚光を浴びる明るい計画が持ち上がっている。旧朝日村の有志が中心となり軍道を復元し、トレッキングコースとして利活用しようと2024年「朝日軍道を復活する会」が組織され、動き出している。

1977年、400余年前の古道への誘惑にかられ、道行改帳に残る地名を頼りに早春の鱒淵から大朝日岳を目指したことがあった。濃霧と強風の中を地形図とコンパスを頼りに彷徨い竜門小屋にたどり着いた時の安堵感を思い出す。

これらの尾根に対して、深く険しい谷もまた大きな特色である。長年の雪崩や水流に削られ、磨かれた自然の彫刻である。山菜とイワナを頼りに4日ばかりで遡行した八久和溪谷が鮮明に浮かんでくる。遡行3日目、柴倉沢出会上流で溪幅が急に狭くなり、河床から4~5mのところの基盤岩に下半身が入るほどの甌穴が数多く見られた。前夜、雨で高台にねぐらを移動しただけに、増水時の荒れ様の凄さは想像しただけで身震いしてしまった。

八久和溪谷は八久和川から出谷川、そして中俣沢と名称を変えて主稜線の狐穴に突き上げている。何気なしに作成した八久和溪谷縦断面によると、名称が変わる地点で河床の勾配が急変していることに驚かされた。古人は脚から伝わる感触で河床の勾配を感じ取っていたのだろうか。

9月中頃ともなると、紅葉前線が日一日と山腹を駆け下りてくる。枝尾根は錦織りなす絢爛たるものであるが、その美しさは一日を境にして色あせてしまうほど慌しい。そして、冷たい雨、強い西風と共に冬を向かえ、季節風の吹き出しとともに本格的な降雪を見るようになる。

名だたる豪雪地帯とはいっても、ラッセルに苦勞するのは1100mまでで、その上はアイゼンの領域になる。山を研ぐ風の踊る主稜は、真冬でも地表を僅かに覆う程度の積雪で、登山路を容易に確認できる。ところが、中岳の風下にあたる金玉水付近は膨大な雪に埋まり、ソフトボールを楽しめるほどの雪原と化してしまう。また、主稜の狐穴からは巨大な雪の稜線が小屋の南側

に伸びてくる。この複雑な積雪状況でも、朝日の山中に建つ山小屋は雪に埋もれることはない。朝日の山を、雪を熟知されて、ここきりないという場所を選ばれた志田忠儀さんの経験にはただ脱帽である。

正月、大朝日岳山頂で朝の陽光に浴したとき、荒川の中俣沢から湧き上がる霧にブロッケン現象が現れ、荒々しく山肌を削ぎ落として小朝日岳が霧中にふわりと浮かんでいたのを思い出す。しかし、日本海からわずか 40 kmということもあり、冬季のひと荒れにあえば、三日間は強風のため動きが取れなくなる。

厳しい冬の山中にも、晴れた日には春を待つ生命の息吹を感じ取れる。凍てつく小枝には新芽が膨らみ、荒涼とした雪稜には点々とキツネの足跡を目撃できる。こんな時こそ、東北の山のもつ温もりを感じ、何のためらいもなく山懐に抱かれ得るのである。東北の山は、頂に足跡をとどめるだけでなく、日程に縛られることなく、ゆっくりゆっくり山懐で遊ぶに相応しいところである。なかでも、朝日連峰はその最たる山である。

(1988、2009、2024 加筆)